



「丁寧に細やかな仕事の積み重ねが 人の胸を打つことを語っている」

朝井リョウ(作家)

1989年、岐阜県垂井町出身。2009年、「桐島、部活やめるってよ」で第22回小説すばる新人賞を受賞しデビュー。13年「何者」で第148回直木賞を、21年「正欲」で第34回柴田錬三郎賞を受賞。中日新聞夕刊他で連載された「生殖記」が今年10月に刊行予定。

ジブリパークを歩いて Vol.2

「ジブリパークを歩いて みていかがでしたか？」

東海地方やスタジオジブリ作品ゆかりの方が肌で感じたことを語る「ジブリパークを歩いて」。2回目は岐阜県出身の作家朝井リョウさんです。2度目の来園で、今回は第2期整備エリアの「もののけの里」(昨年11月開園)と「魔女の谷」(今年3月開園)を巡りました。

初めて訪れた「魔女の谷」で、「ハウルの城」を目の前にした時のインパクトが凄まじかったです。かつて映画『ハウルの動く城』を見た時、まさか生で見られる日が来るとは思っていませんでした。



「ハウルの城」の細部までじっくり観覧

昨年3月に3エリアを巡った時にも感じたことなのですが、造形物ひとつひとつのクオリティがとても高く、その時は、ミニチュアの制作に関わっている友人と一っしょだったのですが、その友人が隣ですと感動してしま

たね。ジブリパークでは、妥協せずに細かく世界観を作り上げていくということを感じる部分が多くて、今回もたくさん拝見できて素敵な気持ちになりました。実は一番楽しみにしていたのが「グーチョキパン屋」でパンを買うこと。ジブリ好きからすると一つの夢で、最初にニュースで知った時に「そうそうーそういうことー！」って思いました(笑)。実現してくれてうれしいです。でも今日は買えなかったもので、次回は必ず買いたいです。

「特に印象に残ったものは？」

「グーチョキパン屋」のキキの部屋(屋根裏部屋)は、『魔女の宅急便』を大人の物語として見ていた子どもの頃の自分に戻れる感覚がありました。一人暮らしの心細さだったり、最低限しかない家具だったり、新しい世界への希望があるゆえの空っぽ感みたいなものだったり。子どもの頃、自分がいつか一人暮らしをしてこういう気持ちになるのかな、と思いつながら見ていたのに、いつの間にか自分の年齢が通り越していて、でも再現されたキキの部屋を見るとまた心が戻っていく感じがしました。私の世代の人たちにとって、時空を行き来できる感じがすごく楽しいんじゃないかな。



「グーチョキパン屋」の屋根裏部屋に置かれたノートにメッセージを残す朝井さん

「もののけの里」は、景色がとても素敵でした。もともとあった場所を生かす形で作られていて、里としての臨場感みたいなものが感じられました。「五平餅炭火焼体験」もできると聞いて、岐阜出身としてはぜひ食べてみたいので、これも次回やってみようかな、というつもりです。

「地元・東海地方にジブリパークができて、どんなお気持ちですか？」

ジブリ作品は子どもの頃から見てきて、親しみがあるんだけど、圧倒的にわからない部分もあることがすごく魅力的でした。宇宙みたいな存在というか。それが地元エリアで実際に行ける距離に、世界として存在することが衝撃で、本当にうれしいです。ジブリパークの造形物は、どれも細部にまでこだわって作られていることが伝わってきます。結局は丁寧に細やかな仕事の積み重ねが人の胸を打つということを、ジブリパーク全体が語ってくれている気がします。それは、作り手の端くれとしてとても励まされることなんです。



「もののけの里」で造形物へのこだわりを手で体感

「これからジブリパーク に行ってみようと考えて いる読者にメッセージを！」

大人になるとテーマパークを楽しむ感覚は薄れてきちゃうところはあるかなと思うんですけど、ジブリパークは、余白があるという感覚。過去の記憶を持ち込んで一つになる感じがあるのかな。子どもはもちろんですが、大人が大人のまま楽しめる施設だと感じました。

私は前回真っ先に「ジブリの大倉庫」の「ジブリのなりきり名場面展」(企画展示)に行きまして、撮りたい写真を一気に撮らせてそれはそれは大満足だったので、カフェに間に合わなかったり目当てのお土産が売り切れてしまったり、少し心残りもあって…。皆さんはぜひ優先順位を決めて巡ることをおすすめします！

前回は
俳優竹下景子さん。
その記事は
ウェブサイト
で公開中



チケットは予約制